

民話を楽しくもっ

やっぱりだまされていた庄さん

ゆうきおはなし会再話
挿絵・佐々木 明

向堀（結城市）の庄さんが、年貢を納めてあまった米を馬にのせ、結城の町へ

売りに行つての帰り道のことです。

森のなかを、狐がうる足で立ち、前足でやぶれた古わらじを頭の上へのせて、まるで上品な女の人でも歩くように品をつくって歩いていました。

これが上品な女の姿ならおしとやかに見えるのでしようが、何といても狐のこと、腰をふりふり人間のかっこうをして、人をばかにしたつもりで歩



むかし、結城で
まじむに化かされた
おはなしたま。

じいちゃん、
とんおはなしが
あつたのっ。

んは、
「わっはっ
はっはっ」
とことさら大
声で笑いながら、
「じらっ、腰をふり

ふり何やっていんだ。
「コウン」
とそこへひっくり返りましたが、

いくら化かそうだったって、おれさまを化かすことはできねえんだ。

「おらあ戌歳生まれなんでよ、狐も狸もよりつかねえよ」狐に庄さんの声が聞こえないはずはないのに、この間抜け狐はまだ化かせると思っているのでしょうか。大まじめでよたよた二本足で歩っています。庄さんは、

「畜生め、おれが言っていることがわかんねえか。そんなかっこうしてさんさん人さまをだましたんだべ」

ととなりながら石を拾い、狐めがけて、

「ちくしょうめ」

と力いっぱい投げ付ければ、石は見事、狐の足首あたりにこつんとあたり、狐は、

「コウン」

すぐ四つんばいになって、さっと草むらの中へ逃げ込みました。その時後ろ足はひきずっていたようです。

さて庄さんは、狐をやっつけたので、意気揚々と森の道を歩いて行きましたが何事も起こりませんでした。

その森も出はすれのところ、足を痛めて、道のほとりに腰をおろして休んでいる、美しい女の人がいました。

さつき狐に出会って、石をぶっつけておいとばしたばかりなので、一瞬、庄さんも



〈ぎょつ〉としましたがそれは本当の人間らしいのです。それでもなお

さら確かめるように、

「こんな所で何してんだえ」

と声をかけますと、

「あまり先を急ぎすぎましたので、ついうっかり道に張り出している木の根につまみずいて、足首を痛めてしまいました。その木の根です」

と、しつとりとした美しい声で答えながら、そのつまみずいた木の根を指差しました。

「いたかったでやんすべ、

歩けねえんかえ」

と心配そうに、狐なら正体をあらわしてくれようと心に秘めて尋ねれば、女は、

「少し休めば大丈夫でしょう。疲れたので一息いれたかったところでした」

と上品な声で答えます。

「どこまで行くんでやんす」

と聞きますと、

「はい、家へ帰るところです。私は小山おやま

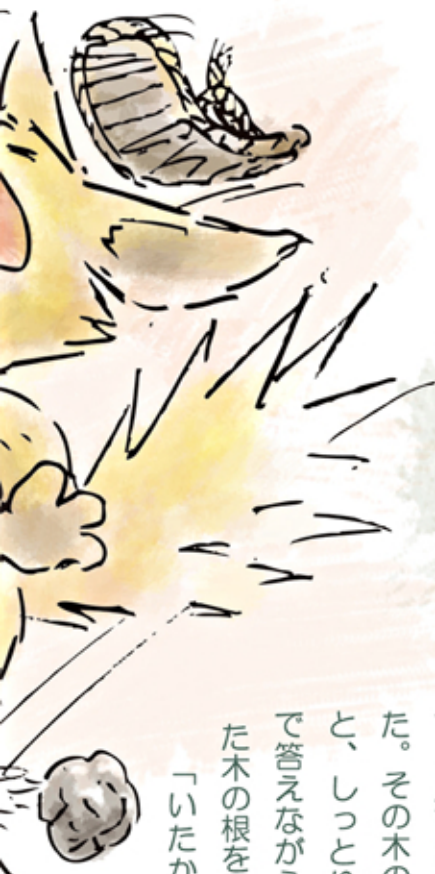
(栃木県小山市)の武州屋です」

庄さんは、へああ、そうだったのかと、内心ほっとしました。確かに見覚えのある顔だと思っていたが、思い出せなかったのです。

「武州屋のお内儀かみさんかえ。なんだ、どっかで見た顔だと思ってやんした。おらも馬方で仕事に行ったことが何度もありやんす」

ともあれ、狐じゃなかったことがはっきりしたので、庄さんもすっかりうちけました。

「日も傾きかかってきましたし、この





森は悪い狐がいるとも聞いていますので、明るいうちに通り抜けようと思っていたところでした。よいお方にお会いできまして、うれしゅうございます。あなたさまが通ってお出でなされた道なら大丈夫でしょう」と言えば、庄さんは、今狐を追い払って来たところとて、

「だいじょうぶでやんすとも」

とうなずきながら、気はあらいがもともと親切な男だったので、

「ちよっくらここで待っておくんなせえ。結城で買ってきたいわしを家さ置いて来たら、馬に乗っけて送ってあげやんしやい」

と云えど、

「ありがとう
ございますが、
痛みもだいぶ
うすらぎまし
た。この森を通
り抜けてすこし行
けば、結城の取り引

き先のお店へ、私どもの若い衆が
来ているはずですよ。お疲れのところです
から心配下さいますな」

と遠慮して、つと立上がりながらよろよ
ろとよろめいて美しい眉を痛そうにしか
めました。

「そうら見らっせ。そんだからいわねえ
こっちゃんえ。家さひとつぱしり行って
くっから待ってらっせ」

「すみません」
消えいるように答えるのを後に、庄さん
は急いで家へ帰りました。

買ってきたいわしを上がりはなへ、ポン
とぶんなげると、

「ちよっく行ってくっかな」

と言うと、女房が、

「なんだえ、今けえって来たばっかりで、白湯も飲まずに出て行くなんて何でそんなに慌てんでえ」

「小山の武州屋の内儀さんを送ってやんなくっちゃんねえんだ」

「お内儀さんて、どんな人だえ」

「何だっけいがっぺな、うるせえな。おら忙しいんだ」

「そんなよその家の内儀さんのことて、何もそんなに慌てなくたってよかっぺ」

口をとんがらかして言う女房の文句を聞き流し、武州屋のお内儀さんの待っているところへ急ぎました。

「こんなに親切にしていたら、お礼の申し上げようもございません。本当に助かりました」

と感謝するお内儀さんをいたわりながら馬の背に乗せた庄さんは、森の中へ入って行きました。

やがてさきほど間抜け狐に出会ったところを通りましたが、すこしも変わったことがありません。庄さんはさきほどのわらしを頭にさせた間抜け狐のこ
とを、おもしろおかしくお内儀さんに
手柄顔して聞かせながら、そこを通り
抜けました。

「まあこわい、私だったらどうしま
しょう。おそらく化かされていたで
しょうねえ」

「まあ、普通のもんじゃ駄目だなえ、
ふんだからやっぱりおらが送ってやん
なくちゃと思って送んさえ」

「ありがとうございます。もし私がさ
きほど足をくじいていなければ、私が
ひっかかって、今頃苦しんでいたに違
いありませんわ」

「ほだなあ、あるいはおらでなくて
お内儀さんを化かすつもりでしたとこ
ろを、おらに追っとなされたんかも知
んねえ」お内儀さんが恐ろしがるもん
だから、庄さんはいい気になっておひ

れをつけて話を続けます。夢中になって話
ながら歩いているうちに武州屋へ着きまし
た。通用口から入り、庭に面した立派な座
敷に通された庄さんは、お内儀さんの恩人
だというので、この家の主人をはじめ家中
の者の丁寧な挨拶を受けたうえ、これまで



食べたこともないような山海の珍味
を御馳走になりました。お内儀さん
が、足首の怪我を家人にたずねられ
て、

「悪いやつに石を投げられて」
と言ったように聞こえたのも、うま
い酒をたくさん飲んで、べろんべろ
んに酔っぱらってしまった庄さんは、
たいして気にもしませんでした。や
がて、

「今晚はせひ泊まっていってくれるよ
うに」

と家中して引き止めるのをたって帰
ろうとすれば、

「それでは途中悪い狐もいることだ
し、かごでお送りします。馬は明日
若い者がお届けしますから」

と言つのを、

「なあに、馬に乗って行けば、馬が
勝手に歩いて行くから大丈夫だ」

と断ったのは、後で考えて見ればま
あ上出来でした。

持ちきれないほどどっさり御馳走やらお金やらを買って、上機嫌で馬に乗り、鼻歌まじりで家へ帰って来た時はもう夜もしらじらと明け初めていました。

「おっかあ、いまけえったと」と、女房の喜ぶ顔みたさにその土産物をどさっと置けば

「今頃まで、どこさほつつき歩いてたんだい」

と、女房はぶんぶん怒っています。

夕方帰って来たと思ったら、

「いわし買って来てやったぞ」

なんて言いながら、馬糞をいっばいかますに入れたのを上がりはなへ投げだしたまま行ってしまい、今度は明け方になって正体もないほどに酔って帰ってきて

「なにっ。いわしじゃなかったってっ」

何か冷水をかけられた思いで、急に酔いがさめるのを覚えた庄さん



が、今大事に抱えて来た御馳走の包みを開いて見れば、馬糞とみみずがいっばい、さらに金包みの中はみんな木の葉でした。

おしまい